

Eureka XII

六年制通信 No.6 令和6年5月10日(金)号

出会いは求めるもの

君たちも何度か耳にしたことがあると思いますが、その気になれば人生はいつでも軌道修正ができると言われてしています。これは確かにその通りですが、軌道修正が急に困難になる時があると思います。それはちょうど高校を卒業する時です。中学生の間は自分の描く理想の将来像、つまり弁護士になりたい役人になりたい教師になりたい医者になりたいという「になりたい職業」が毎日変わったとしても、別にどうということはありません。しかし高校を卒業し仮に大学に進んだとして、そこから理想像が変わると、これは相当な困難を覚悟しないとイケません。例えば文学部に入学したのちにやはり医者になりたいと思ったとすると、できないわけではないにしろ、ハードルが高すぎて一体何年のロスが出るかわかったものではないでしょう。ですから高校を出ると急に職業選択の幅が狭くなると考えておいていいと思います。もっとも高校時代でも、現代では文系理系を分けるのが当たり前ですから、高校2年生で文系を選択しておいて3年生で理系にしたいと思っても事実上困難なシステムになっています。私は文理を分ける必要はないと考えていますが、これは今の世の中では現実的ではない理想論とされているようです。ということは、高校生は文理選択の時点で自分のなりたい職業、と言いますか思い描く理想の生き方そのものを持っていないてはならないということになります。うかうかしてられませんね。

若いうちは誰でも、自分にはまだ気づいていない潜在力のようなものがあって、何とかしてそれを見つけ潜在力を真の実力にまで磨き上げ、それを発揮できるような職業に就きたいと願うものだと思います。できることなら自分の能力が世のため人のために役立ってほしいと願うのが若者らしい健全な精神の在り方というものです。しかし、その潜在力がどこにあるのかがなかなかわからないのです。要するに自分の特性がわからない、自分が何に向いているか、何が好きなかがはっきりしない、それもまた若者特有の漠然とした不安のようなもので、私たちが若い時もそうでしたよ。もちろん、ただ漫然と学校に通い授業を受けているだけでは、自分の適性なんてわかりません。では自分の適性を知り、将来を考え、理想の生き方を見つけるには今何をすればいいのでしょうか。少なくとも学校に何らかのきっかけはありそうですよ。

私は、二つのことを意識してほしいと思います。自分の適性を知るためには、まず学校生活の大部分を占める座学の中から好きな教科を見つけるようにしないとイケないと思います。小学校から中学校へ上がると、座学の中身は大きく変わってきます。小学校の教科書は対象が児童ですから詳しいことがほとんど書いてありません。小学

校の社会の教科書を読んでみましたが、これで日本史が好きになるかと言えば、ちょっと疑わしくなるほど内容が薄いのですね。これが中高と進むにつれ、詳しく習うようになるし自分でも教科書以外の歴史書が読めるようになるし、興味の対象が絞られてきます。数学が好きになるか、英語が好きになるか、古典か化学か、何でもいいのですが、好きな教科、もっと深く知りたいと思える教科を見つけることが大切です。それは君の一つの適性ですからね。もう一つ、できれば中高でいい先生に出会ってほしいと思います。ちょっと難しいかもしれませんが、実はいい先生像というのはすでに君の心の中にあります。そして「いい先生」というのはきわめて個人的な指標で、君だけのものです。同じ授業を何百人と受けていたとしても、その先生を自分の師と仰ごうと考えたのは君一人しかいないかもしれません。むしろそれが普通です。そういう先生に出会えるかどうかは、君に求める心があるかないかで決まります。ちなみに、先生は目の前にいなくても大丈夫です。私淑すればいいのです。もちろん、私淑すべき先生も君の求める心がなくては見つかりません。もっと知りたいと思える教科といい先生、これらをきっかけに自分の理想の将来像を考えてみるといいでしょう。

今週のおすすめ

・藤原正彦 『美しい日本の言霊』 (PHP 新書)

昭和18年生まれで今年81歳になられる著者の大好きな昭和歌謡のお話。ですから君たちはここに出てくる歌のほとんどすべてを知らないでしょう。ひょっとしたらイルカの「なごり雪」くらいは知っているかな。私は藤原先生に比べればまだまだ若いのですが、今君たちが聴くような歌は早口言葉のようで歌詞が全く入ってきません。老いというものでしょうなあ。ということで、ゆったりと流れる昭和歌謡が私にも合います。この本で感動した箇所が二つあります。「琵琶湖周航の歌」(知らないかな。われは湖の子 さすらいの…)を作詞した小口太郎のことです。歌詞の全文を読んでごらん下さい。当時理系の19歳がこの詩を書いたのですが、今、これを書ける若者がいますかね。旧制高校時代の学生の教養の高さが伺えるでしょ。

もう一人、茨木のり子の「私が一番きれいだったとき」に心を打たれました、というか、探していた言葉を教えてもらいました。茨木さんは11歳で日中戦争、15歳で第二次大戦、終戦が19歳。十代の、最もきれいだった十代の全てを戦時下に生きたわけです。この3番の歌詞が「わたしが一番きれいだったとき だれもやさしい贈り物を捧げてはくれなかった 男たちは挙手の礼しか知らなくて きれいな眼差しだけを残して皆発っていった」です。戦時下の男たちは女性に贈る言葉も物もなく、不器用にも女性が求めてなどいない挙手の礼しかできず、戦争に行き死んでいったわけでしょう。その時の男の目が「きれいな眼差し」だったと茨木さんは言います。私は知覧の特攻記念館に残る多くの写真に共通する眼差しを何と表現したらいいものか、ずっとできずにいたのですが、そうか「きれいな眼差し」なんだと、茨木さんのおかげでやっと言葉にできました。ここだけでも君たちに読んでほしいな。

BGMは サイモン&ガーファンクル の サウンド・オブ・サイレンス でした…。